

県産柑橘・キウイ、出荷を協議 ～ 神奈川橘会出荷協議会 ～



J Aかながわ西湘の沼田組合長が、市場関係者に神奈川県産の柑橘・キウイの販売協力を求めた

柑橘類の本格的な販売を前に、10月13日、神奈川橘会は出荷協議会を開催し、指定市場36社と県内の産地J A（J Aかながわ西湘、J A湘南、J Aはだの、J Aいせはら）が、平成27年産柑橘・キウイの作柄や販売状況、販売方針について協議した。主催者挨拶の中で、J A全農かながわ根本芳明県本部長は、「TPP大筋妥結で、競合果実や果汁の段階的な関税撤廃など国産柑橘への影響が懸念される。J Aグループ神奈川は農協改革を通して、生産者手取りの向上に取り組んでいく。市場と産地・J Aグル

ープ間で今まで以上の結束が必要だ。市場と連携し販売環境を整えたい」と市場に協力求めた。

産地を代表し、J Aかながわ西湘の沼田照義代表理事組合長が、「27年産みかんは、昨年より若干生産量が多い見込み。キウイは順調に生育している。今の時期、生産者は最後の管理作業、仕上げ作業に入っている。販売環境は厳しさを増していくが、産地の情報を発信し、市場・販売店の要望に添いながら、計画的出荷で有利販売を目指したい」と挨拶した。

市場側は、今年の秋果実の動向を「産地の努力により、前年産より高品質な果物が流通しているが、気象の影響等で出荷・販売ペースが例年より速い」と説明。「26年産みかんは極早生の品質への不満などから販売開始でつまづき、以降厳しい販売状況が続いた。その影響で27年産みかんの取り扱いを警戒する向きが一部で見られる。出荷終盤は特に選別を徹底して欲しい」「量販店から要望が多い5キロ箱の規格を用意して欲しい。扱いやすく、腐敗対応もしやすい」「配送スケジュールを見直したい」などの要望が出された。キウイについては、「国産キウイの生産量をこれ以上減らさないで」と強い要請があったほか、「海外のキウイが出回る前に国産の販売を完了させたらどうか」「Sサイズの需要への対応を」などの提案が出された。

注目する動向として「外国人観光客の増加に伴う高品質果実の需要の高まり」を指摘。「特に都市部においては顕著。視野を広げ販売先の開拓を」と提案した。また農業人口減少を危惧し、「高齢者が日本の農業を支えている。定年後から80代までの就農・営農支援が必要では」との意見が出された。

神奈川県産の平成27年産温州みかんの生産量は、昨年20,900トンを上回る22,620トンが見込まれる。果実肥大は順調だが、長雨などの影響から糖度・酸度が若干低く推移しており、今後の好天に期待がかかる。中晩柑は、肥大も順調で収穫量も前年を上回る見込み。平成27年産キウイの本県生産量は、約2000トンと生産量は昨年比98%の予想だが、順調に肥大し、高品質な果実が期待できる。